

《小学唱歌集》におけるソルフェージュ及び和声 に基づく教育アプローチについての考察

高 濱 絵里子

はじめに

日本における教科としての「音楽」は、明治5年（1872）に制定された学制において、学制で定められたところによる学区制の小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」という教科が定められたことを起源とするが¹、実際には明治12年（1879）に開設された音楽取調掛によって研究され取り入れられた西洋音楽を基盤とした唱歌教育に始まり、義務教育課程の中で教科としての位置を維持しながら、様々な歴史的経緯を経て現在まで続いている。

現在の義務教育課程において9年間音楽を学ぶ機会が与えられていながら、楽譜が読めない大人が多く存在し、さらに最近では専門教育機関である音楽大学でさえも、楽譜の読み書きをはじめとした学生の音楽基礎能力の低下が頻繁に指摘されるようになった。さらにこの問題は、昭和41年に刊行された音楽教育研究所編『新訂 新しい音楽教育 理論と教材（小学校編）』（1966、音楽之友社）においてすでに、次のように述べられている。

「…音楽のどの領域を学習するのにも、最も基本になるものは“読む力”“聞き取る力”“書く力”ではないでしょうか。このような、いわゆるソルフェージュ^{ママ}の能力こそ、これからの音楽教育に特に強く要望されるものだと信じます。」²

「小学校6年、中学校も合わせると9年にも及ぶ音楽学習をしても、楽譜さえ十分に視唱できない、満足に楽譜もかけない、ということをしばしば耳にするのです。音楽の基礎能力にはいろいろあげられましょう。しかし、あらゆる音楽学習の基礎となるのは“ソルフェージュ^{ママ}”です。」³

つまり、半世紀が経過した現在に至るまで、上記の問題は解決されることなく来てしまっている。これらは音楽専門教育の問題以前に、教科音楽教育の抱える問題がそのまま反映されているように考えられる。

さて、平成29年度に学習指導要領の大幅な改訂が実施され、この新学習指導要領において音楽科でも様々な改定があった。そのなかでも、「音楽的な見方・考え方」を働かせた上での「知識及び技能」の習得が学習の目標として明示され、「知識」の育成が重要視されるようになった点は、大きな前進と考えたい。ところで、ここで言う音楽科で育成する「知

識」とはどのようなものであろうか。山下薫子編著『小学校新学習指導要領ポイント総整理』(2017、東洋館出版社)によれば、「子供が音楽を形づくっている要素の働きについて理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるような知識である。」⁴とされている。この知識を習得するために必要な「音楽的な見方・考え方」を可能にするのは、すでに引用したように「ソルフェージュ」(ソルフェージュ)の中の楽譜の読み方・歌い方ではないだろうか。一方で「音楽科の学習が、子供の音楽活動と離れた知識の習得や、技能の機械的な訓練にならないように配慮し」と解説がされているが、まずは文字を習得することで初めて本が読めるように、音楽においても「子供の音楽活動」以前に読譜を可能とするための知識の習得、機械的にならないソルフェージュの訓練から和声的な理解につなげることが必要不可欠であると考ええる。これらの基礎的な能力を得てこそ、本当の意味での自発的な音楽への関わりが生まれ、そこから音楽的な見方・考え方が養われ、継続及び発展的な知識の習得へと繋がるのである。

同書内で「……長寿社会を迎えた我が国で、人々が生涯にわたって能動的に学び、音楽と豊かに関わっていくために、小学校の音楽科は、その種蒔きをする重要な時機である。」⁵とあるように、小学校6年間に於いて音楽の「知識」を中心とした基礎教育を十分に行うことができれば、その後の中学校、高等学校における教科音楽教育は内容をさらに充実させることが可能となり、合唱、吹奏楽、管弦楽といった課外活動にもより繋がり、「生涯にわたっての音楽との関わり」を築く可能性を大きくする。以上のことから、小学校6年間に於ける教科音楽教育の重要性、さらにはその任務を負う教員の責任は非常に重いことは言うまでもない。

教科音楽教育の抱える問題と今後の展望を考えるにあたり、日本の音楽教育の出発点となった音楽取調掛の事業、特に唱歌教育のために音楽取調掛が編纂した《小学唱歌集》(全三編)を確認したところ、無に等しい状態から出発した音楽教育だったからこそ、西洋音楽の理論がそのまま反映された教育がなされていたかを発見できた。音楽取調掛の事業については多くの先行研究があるが、本論においては、《小学唱歌集》(全三編)がソルフェージュ及び和声の教育的な視点から編纂されているということについて考察を行う。

1. 日本における唱歌教育の創始

日本における唱歌教育の創始については既に沢山の先行研究がなされているが、本論のテーマに関連し非常に重要な部分であるため、先行研究を基に教科音楽教育の視点から再度整理することとする。

「明治以後、音楽教育に関する最初の記録は、明治2年(1869)9月、開成学校より発刊された、内村正雄訳『和蘭学制』であった」⁶。この中でオランダにおいて唱歌が教科として学校で教えられていることが日本に初めて知らされ、その後明治5年8月2日に太政官布

第214号として公布された「学制」の中で唱歌が小学校の教科として規定されるのだが、まだこの段階では「唱歌当分之ヲ欠ク」とされていた。その後明治6年に文部省から発刊された『仏国学制』初編卷一のなかでは、フランスの「上等小学校」において幾何学や物理学と並び必修の全7科目中の1科目として「唱歌」が定められていること、「女兒小学校」では「下等小学」、「上等小学」の双方で「唱歌」が定められていること、卷之二では「小学師範学校」で「音楽及び体操」が教科として定められていることが紹介されている。さらに専門学校を紹介している第三編卷之五では、「謳歌戯語学校（＝唱歌と演劇学校）」＝「コンセルヴァトワル^(ママ)」が紹介されている。また同年文部省より発刊された、明治4年から6年にかけて欧米視察を行った岩倉具視一行に参加し、主に欧米の教育を視察した田中不二麿によって帰国報告された欧米の教育事情をまとめた15冊からなる『理事功程』では、多くの個所で音楽教育の様子が記述されており、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツにおいて、学校や女学校、幼稚園などでも音楽が教えられていることが示された。なかでも、卷之九ではドイツの師範学校における「教員養成ノ方法」の項目で教科が記述され、「唱歌」以下に「音楽ノ法及其教方」「ヒヲリネ（鼓弓）」（＝ヴァイオリン）「ピアノ（楽器）」「オルガン（風琴）」と詳細な科目が紹介された。続く明治10年1月に出版された田中不二麿著『米国百年期博覧会教育報告』などで欧米の音楽教育の目的も紹介され、この頃になると次第に教育における音楽（唱歌）の内容、必要性が少しずつわかり始めてきた。

時を同じくして、明治8年7月8日に公布された辞令により、文部省から「師範学校取調ノ為」としてアメリカに派遣されていた伊澤修二、高嶺秀夫、神津専三郎らが留学から帰国し、開発主義教授法（パスタロッツ主義教育法）が日本に導入された。ここで開発主義教授法についての詳細は割愛させていただくが、この教育主義の中では「唱歌を美育⁷の一科として、その美育的理念に基づいて、“学校音楽”という特殊な分野を考え、そして、学校音楽に必要なのは心情を高尙にさせる音楽のみであるとしていた」⁸。以降、「開発主義教授法の紹介とともにわが国にもたらされた、美育という考えに基づいた唱歌教育は、その後のわが国における音楽＝唱歌教育の、基本的な理念として機能していくことになる」⁹。

現地でこの教育主義を学び、さらには当時ボストンの公立音楽学校の監督であった音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソン Luther Whiting Mason (1828～1897) より音楽を習い、西洋音楽に直に触れた伊澤らが、日本に音楽教育を導入することの必要性を強く感じたであろうことは想像に難くない¹⁰。そうして「伊澤は、ボストン留学時代に、日本に学校唱歌をつくり、さらに、音楽を公学として課す事業をおこすための準備をなし、明治11年(1878)4月8日、文部大輔田中不二麿あてに、[音楽取調事業をおこなうべき上申書]を、目賀田との連名で書いた」¹¹。

明治11年5月21日に帰国後、翌12年10月7日に当時東京師範学校長にあった伊澤に「音楽取調御用掛兼勤可致事」と辞令が交付され、メーソンを招聘し、音楽取調掛の事業が始まっ

た。学校唱歌をおこすにあたり、当時の我国の音楽は、「我国ノ音楽ニ雅俗ノ別アリ其ノ雅ト称スルモノ調曲甚タ高クシテ大方ノ耳ニ遠ク又其ノ俗ト称スルモノハ調曲甚タ卑クシテ其害却テ多シ」¹² というように、唱歌教育の教材としては不適當であった。そのため、

「音楽詩誦ハ固人情ノ自然ニ出ヅル事故其大体ヨリ之ヲ論ズレバ人界中同一タルベキ儀ニテ彼レノ音楽ノ如キモ我ニ適応スベキモノ有……」と、「西洋ノ楽ハ源ヲ希臘ノ哲人ピタゴラス以來数千年間ノ研究ニヨリテ殆ンド最高点ニ達シタルモノナレバ其精其美素ヨリ東洋音楽ノ及ブ所ニ非ズ……」¹³

として、将来国楽¹⁴を興すことを目標としながらも、まずは西洋音楽を取り入れる必要があった。これが、「欧羅巴諸国ニテ最良キ古今ノ曲調、歌詞ヲ採択シ米國ニ在来スルモノト和シ又欧羅巴諸国ノ音楽教授ヲモ合シーツノ創新ナル制ヲ發明シ」¹⁵、当時のボストンで唱歌教育にかなりの実績をあげていたメーソンを招聘した理由である。

2. 音楽取調掛伝習生への、唱歌教育者養成を目標とした教授内容

2-1. 概要

伊澤が就任早々の明治12年（1879）10月30日付で文部卿寺島宗則に上申した「音楽取調二付見込書」のなかで、今後音楽取調掛が行なうべき事業は以下の三項目に整理された。

第一「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事」

第二「将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事」

第三「諸学校ニ音楽ヲ実施スル事」

メーソンが明治13年3月2日に到着すると、まだ伝習生のいなかった音楽取調掛よりも一足先に、東京師範学校附属小学校及び東京女子師範学校附属練習小学並びに幼稚園において、メーソン編著の掛図（教材）を用いた唱歌教育が始められ、一方取調掛にあっては小学校唱歌の選曲他が進められた。明治13年10月には最初の伝習生22名が入学し、その中には後に伝習生から最初に取調掛員となり、唱歌集の選曲、編曲にも従事することとなる宮内庁雅楽部伶人であった上眞行、奥好義、辻則承も含まれた。次いで、翌14年には計13名が入学した。

明治14年10月に示された「音楽取調所授業課目」によると、メーソンによってピアノ、高等唱歌に加え、取調掛員と助教に対しては管弦楽（器）の伝習、和声講義、またメーソンの著書『音楽指南』の訳者内田彌一によって音楽指南（音楽教授法）の講義も伝習生に毎日行われていたことがわかる。

明治15年9月からは、アメリカやヨーロッパの音楽学校制度を丹念に調査した伊澤らの努力により、四年制のコンセルヴァトワールに近い形での、新しいカリキュラムと教則が編成された。明治15年7月にメーソンは帰国することとなるが、16年2月より（19年3月ま

で)「芸術音楽高揚をはかり海軍省が傭い入れていた」ドイツ人音楽家フランツ・エッケルト Franz Eckert (1852 ~ 1916) が海軍省と兼務で音楽取調掛に勤務することとなり、教育水準も次第に高くなっていった。

2-2. 教育内容

「音監開申書類明治十四年」には最も古いカリキュラムが記されている。「伝習期限は原則として一年であり、前半はピアノと唱歌、後半はもっぱら音楽教育の実習にあてられている」¹⁶。その後明治 15 年 9 月に四年制のカリキュラムに改変され、音楽史、洋琴、調絃法、楽典、唱歌、和声、バイオリン、箏、胡弓、聴音、風琴、講読・書写、管弦楽がそれぞれ授業科目として、各学年別に時間数から学習内容まで細かく定められた。このように、音楽取調掛設立からわずか数年でこうしたカリキュラムが組まれていたことがわかる。

さらに、伊澤が前出の「開申書類」の「音楽取調掛報告」の中で、「……洋琴ノ伝習ハ楽音ノ聴力ヲ固定スルト楽譜ノ讀力ヲ増進スルトニ在ルヲ以テ凡ソ音楽ヲ学バントスル者ハ必ズ欠クベカラザルノ一科ナリ……」¹⁷と報告しているように、ピアノは音楽取調掛における実技教育の最重要科目として扱われ、明治 15 年のカリキュラム改変後も、ピアノのみが一年から四年までの全学期を通して実習が行われ、その時間数も一、二年は一週九時間、三、四年は一週八時間と抜群に多かった。

続いて、前出の教科の中から「和声」の教育を見てみよう。前述の通り、和声講義が最初に施されたのは伝習生ではなく伝習生を指導する側の取調掛員や助教の伝習人に対してであったが、毎週三回各一時間ずつ、メーソンが教授した。その成果については「伝習人進歩ノ現況」に「……本年伝習人ノ顕然タル進歩ヲ占メシハ其聴力ニシテ之ヲ前年ニ比スレバ大ニ進達シ……(中略)…高等ノ唱歌ヲ演習セシメ以テ音声ノ変転活動ヲ聞別スル耳力ヲ練リ特ニ毎週三回和声学ノ講義ヲ授ケ諸声音ノ協不協和及び其諸和絃ノ転回進行等ノ理ヲ講求シ……」¹⁸とあるように、和声と唱歌教授法の授業が伝習人の音楽学習上にめざましい進歩をもたらしたことが報告された。

前出の明治 15 年のカリキュラムの改変により和声も伝習生を対象とした科目に加わり、その講義は 14 年にメーソンから直接教えを受け、和声を習得したと思われる上眞行、奥好義、辻則承らが担当することとなった。和声の講義は第二学年の前期より開始し、第二学年の前期で和声を学習する上での予備知識を、後期で音程及び其転回(音程)から長短音階の三和音、三和音の連結まで、第三学年前期では三和音の転回(形)、七の和絃(和音)、三和音の転回及び移法(移調)まで、後期で連続法(反復進行)、静止法(終止形)を、第四学年前期では転法(転調)、懸係法(掛留)、調和法(和声付け)等を、そして後期では楽曲製作ノ法(作曲?)まで、段階的な学習内容が詳細に定められた。これらの学習内容だけでなく、四年前期までは一週に三時間、和声講義が充てられていたことから、和声教育が重要視されてい

たことがわかる。

また、資料として残されている当時の試験問題¹⁹から、数字付低音での和声教育が施されていたことがわかるが、ここで東京芸術大学音楽取調掛研究班著『音楽教育設立への軌跡』（1976、音楽之友社）376頁にある興味深い一文を紹介する。

「……また当時の伝習生たちがどの程度にこの授業をこなしていたのかを知るために実際の答案に目をとおしてみると、数字付バス課題では、さすがに和音の選択を誤る者はいない。…（中略）…成績が芳しくない答案でも87点ということを考えると、総じて和声の授業は順調に行われ、成果もあがっていたのであろう。」

以上のことから、ヨーロッパの伝統的な和声の学習法としての数字付低音が重視されていたことがわかる。当時のメーソンによる和声授業の様子は、東京芸術大学百年史刊行委員会『東京芸術大学百年史東京音楽学校編第一巻』（1987、音楽之友社）に掲載されている、中村専『和聲學ノート』（英文）²⁰からも知ることができる。今後この資料の翻訳と分析、また東京芸術大学附属図書館や音楽学部大学史料室に残されている当時の試験問題及び答案を確認し、当時行われていた和声授業の内容を確認する予定である。

3. 《小学唱歌集》の分析

3-1. 音楽取調掛編纂《小学唱歌集》（全三編）の概要

明治13年（1880）3月2日にメーソン来日後、すぐに小学唱歌集の編纂事業が始まり、その後、初編が明治14年（1881）11月、続いて第二編が明治15年（1882）6月、第三編が明治16年（1883）10月に文部省の裁可が下り、それぞれ翌年の明治15年4月、16年6月、17年6月に刊行された。刊行部数は初編3000部、第二編3000部、第三編2000部で、「これらの教材は、発刊とともに、直轄諸学校、諸府県および外国教育家等に配布されたが、好評を博し、関係者をして『抑著書ノ世上ニ行ハルルノ速ヤカナル此ノ如キハ近代ノ著書ニ於テ其例稀ナルモノトス』といわしめるほどの勢いで求められたのである」。²¹

初編の冒頭に掲載された伊澤修二の緒言の中に、「……之ヲ東京師範学校及東京女子師範学校生徒并両校付属小学生徒ニ施シテ其適否ヲ試ミ、更ニ取捨選択シ得ル所ニ随テ之ヲ録シ、遂ニ歌曲数十ノ多キニ至レリ。……」とある。編纂にあたり、候補に挙げられた歌曲を事前に師範学校生及び小学生への唱歌指導に実際に用い、その適否を確認した上で楽曲を厳選した点は、この小学唱歌集の学習効果を考察する上でも大変注目すべきことである。

この音楽取調掛編纂の《小学唱歌集》は、前出の『音楽教育設立への軌跡』（1976、音楽之友社）に、これら三編に収録された曲の出典元や使用音域、拍子、調性など大まかな分析結果がまとめられた先行研究がある。学習過程における音楽要素の相互的な関わりも含め詳細に分析すると、メーソンの「正シク順序ヲ逐テ」教授すべきという教え通り、学習の進度が実に良

く考えられた編纂がなされていることがわかった。三編を通しての大まかな概要は、まず初編から第二編までは単旋律による唱歌（単音唱歌）が計49曲、第三編には単音唱歌に加え二声から四声までの輪唱、二部合唱、三部合唱までが計42曲収録されており、第二編までに音名、旋律音程、音価、リズム（シンコペーションは除く）、拍子といった、音楽の基礎知識、言い換えればソルフェージュの初歩を段階的に一通り学習し、その学習を基に第三編では単音唱歌だけでなく二声から四声部までの輪唱、さらに二部合唱、三部合唱を通して段階的に和声音程から和声の基礎を学べるようになっている。次に、各編ごとの詳細な分析を記す。なお、今回はテキストの選択や内容、日本語と旋律の関係等については触れていない。

3-2. 《小学唱歌集初編》

初編には33曲収録されているが、その半数近くはメーソン著“National Music Charts (Second Series)”から自ら選んでいる。また、No.31（第三十一）²²、32は芝葛鎮作曲による楽曲を採用している²³。

調性はNo.1～19がハ長調、次いでNo.20は属調のト長調、No.21は下属調のヘ長調、という近親調の範囲で調性が選ばれており、その後はNo.28、29がハ長調、No.24、26、27、30がト長調、No.22、25、33がヘ長調、No.23、32のみが当初の近親調の範囲を超えるニ長調となっている。ト長調がハ長調に次いで多いのは、メーソン著『音楽指南』にある通り²⁴ト長調の g^1 から d^2 の五音に対し「此五音ハ兒童ノ天性爽朗ニ発聲シ得ベキ調格ニシテ……」というメーソンの考えによるものと思われる。

拍子は2/4拍子から始まり、3/4拍子、4/4拍子の順で続き、No.11の4拍子以降は、No.24の3/4拍子を除き、すべて4/4拍子の曲が選ばれている。

各曲で使われている基準の音価は、四分音符と四分休符から始まり、No.7で二分音符、No.13で二分休符、No.17で八分音符、No.20で付点四分音符、No.27で付点二分音符の順で新しくあらわれる。

旋律音程は、No.1の2度から始まりNo.3で3度、No.5で4度、No.12で5度、No.16で6度、No.27で8度と、2度から6度、8度の順で新しくあらわれる。

最後に音域については、 c^1 - d^1 の二音(2度)から始まり、より広い音程を使用することによって、オクターヴ以内からオクターヴ以上まで音域を広げている。

33曲全体を通して、音域が広がる際に、音が取りやすいよう新しい音には順次進行で初めてその音に入る（次頁譜例1～4参照）、旋律音程は1度から6度までが使用され、難しい7度は扱われない。さらに新しい種類の音価や拍子、リズム、また転調を扱う楽曲の場合は、概ね旋律音程は1度から3度までの歌いやすいものとなっており、また前出の要素を再度取り上げる楽曲が何曲が続く。編纂において細かい教育上の配慮がされていることがよくわかる²⁵。なお、これらの配慮は第三編まで引き続きみられる。

【譜例1】第一〈かをれ〉



【譜例2】第二〈春山〉



【譜例3】第四〈いはへ〉



【譜例4】第七〈春は花見〉



このように初編はNo.14まではメーソン著“National Music Charts (Second Series)”からの採用が殆どで、唱歌というよりソルフェージュの基礎練習課題であるが、No.15以降はヨーロッパの民謡や実際に歌われている楽曲からとられ、付点リズムや転調、さらには複合的な楽節構造（＝楽曲形式）など、内容が次第に充実していく。スペースの都合上、No.1～12²⁶の分析結果を参考資料として稿末に付録する。

3-3. 《小学唱歌集第二編》

第二編にはNo.34～49の計16曲が収録されているが、一部はメーソン編著“National Music Charts (First Series)”, “Second Music Reader”に掲載されているものの、メーソン作曲による楽曲はなく、その多くがヨーロッパの民謡やアメリカでよく知られた楽曲からとられている。また、この第二編でも芝葛鎮、伊澤修二の作曲による唱歌が1曲ずつ収められている。

調性は初編で用いられた4つの調（調号なし、＃1つ、♭1つ、＃2つ）に加え、No.42でイ長調（＃3つ）が用いられる。他は、No.40, 49がハ長調、No.34, 41, 45がト長調、No.37, 38, 48がヘ長調、No.35, 36がニ長調、No.46がまたイ長調となっている。芝葛鎮作曲No.39〈鏡なす〉、伊澤修二作曲No.44〈皇御国〉、作曲者不詳のNo.47〈天津日嗣〉の3曲は

調号が記されているものもあるが、実際の旋律は日本音階的である。

拍子は No.36 で 6/8 拍子、No.43 で 2/2 拍子が新しくあらわれることで、基本的な拍子が全て出そろふ。その後 6/8 拍子は No.38, 42 に見られるが、2/2 拍子については No.43 一度限りである。その他は、No. 34, 40, 41 が 3/4 拍子、No.35, 37, 39, 44 ~ 49 が 4/4 拍子である。4/4 拍子が多く見られるのは 4/4 拍子が標準的な拍子と考えられていることであろうか。

音価は No.36 で八分休符、No.37 で全音符、No.41 で付点八分音符と十六分音符が新しくあらわれ、全音符から十六分音符まで、この第二編で基本的な音価が全て出そろふ。

旋律音程は No.37 で 7 度の音程が初めてあらわれ、拍子、音価同様に旋律音程（音高）も第二編にて、1 度から 8 度までのオクターヴに含まれる音程が全て出そろふ。

音域は初編から特に発展はないが、音域は子供の声域が考慮されている。

No.38 でタイ、フェルマータ、No.46 で旋律の簡単な変奏（装飾）、No.48 で下行の反復進行によるフレーズ（ゼクエンツ）も扱われ、より内容的に高度な楽曲が第二編に収められている。

No.37 で初めてあらわれる 7 度の旋律音程は、譜例 5 のように旋律の途中からを転回音程で考えれば冒頭の旋律から始まる順次進行同様に歌うことができる。直後の No.38 においても、八分休符を挟む 7 度の音程が出てくる。

No.45 では譜例 6 のように、冒頭で音程が d^1 音を基本に 4 度、5 度、6 度と順次広がる。6 度の旋律音程は 7 度に次いで難しいが、No.45 において 6 度の音程を意識的に認識するという学習意図があったのではないだろうか。

【譜例 5】第三十七 〈かすめる空〉



【譜例 6】第四十五 〈栄行く御代〉



3-4. 《小学唱歌第三編》

第三編には No.50 ~ 91 の計 42 曲が収録されているが、全体は No.50 ~ 60 が単旋律、No.61 及び 62 では二声に分かれ、No.63 ~ 67 が琴の伴奏を伴った俗曲や雅楽唱歌に由来するもの、No.68 ~ 72 が輪唱（無限カノン）、No.73 ~ 82 が二部合唱、No.83 ~ 91 が三部合唱で構成されている。また、三編では用いられる調性もさらに増え、ホ、変ホ、変イ長調（ \sharp 、 b それぞれ 4 つまで）とト、ニ、ヘ、ホ、イ短調（調号なし、 \sharp 1 つ、 b 1, 2, 4 つ）²⁷の

楽曲が数曲収められている。

3-1. で概要を述べたように、第三編の主な目的は和声的な音楽の、和音とそのカデンツを学習させることであると考え。前半に収められている単旋律の曲にも、倚音や刺繍音といった非和声音、転調、さらには終止形を伴う旋律進行（カデンツの認識）など、和声に基づいた要素が見られるようになる。

部分的に二声部に分かれる No.61, 62 の後、No.68～72 に2声から4声までの輪唱曲が続き、単旋律の模倣的な重なりから作られる輪唱があらわれることで、前半の単音唱歌と後半の二部・三部合唱が関連づけられている。

No.73～82 は二部合唱だが、No.73 はモーツァルトのオペラ《魔笛》の中のパパゲーノのアリア〈恋人か女房か Ein Mädchen oder Weibchen〉が原曲となっている。

No.73, 74 で二声部による3度、75 ではその転回音程にあたる6度の平行進行が多く見られる。続く No.76 では冒頭4小節が6度の平行、続く4小節が前の4小節を転回させた3度の平行で繰り返している。No.73～76 の過程で転回音程を学ばせる意図があるように思われる。その後の楽曲では、短7度音程や転調を含み、旋律音程及び和声音程が変化に富む。

輪唱、二部合唱を経て No.83～91 は三部合唱となり、より和声的性格が強くなる。使用和音の種類とその転回形に焦点を当てて見ると、最初の No.83 は譜例7のように、I、IV、V（V₇）度の和音における主要三和音の基本形のみで構成される。次の No.84 でII、VIの和音が加わり、転回形は第一転回形、第二転回形が加わる。その後 No.85 でドッペルドミナント和音、No.86 で下屬調の属七和音（経過的転調）、No.87 で譜例8のようにⅢ度、No.89 でⅦ度（減三和音）の各三和音が新しくあらわれる。また、多くの楽曲に経過和音、倚和音、刺繍和音も含まれている。

No.84 以降は、多くがI度の第二転回形を属和音の前に用いたカデンツ（終止形）を含み、No.90, 91 では転調も含む。以上のように9曲の中で、I度からⅦ度までの全ての和音、経過的転調に用いられる他調のドミナント和音、そして和音の基本形のみならず転回形も用いられ、より複雑なカデンツが理解できるように、明確な学習意図で編纂されていることがわかる。

【譜例7】第八十三〈さけ花よ〉 冒頭4小節

I I IV — I — I — I V V₇ I

【譜例 8】 第八十七 〈治る御代〉 終わり 4 小節

3-5. まとめ

先行研究により、小学唱歌集が段階的な学習内容になっていることは知られてきた。本論では初編から第三編を通した、より詳細な分析により、各曲にそれぞれ明確な学習意図があり、ただ順に扱うのではなく選曲と配列に細かい教育的配慮がなされており、段階的にしっかり学習できるような緻密な編纂がされているのが判明した。

明治 14 年 7 月の音楽取調掛伝習生期末試験において、初編の中から唱歌のみで 6 曲、他にピアノやオルガン等楽器の伴奏と共に歌う課題が計 15 曲、試験課題に使用された記録がある。これは現在の視唱の試験にあたるだろう。以降も、入学試験、学期末試験、授業科目、その全てに唱歌が用いられていた。この《小学唱歌集》がソルフェージュ教育の役割を果たしてきたことがうかがい知れる。学校での音楽教育のために日本で初めて編纂された《小学唱歌集》に、このようなソルフェージュと和声に基づく教育が考えられていたことから、改めてメーソン、伊澤修二を中心とした音楽取調掛の事業の功績が確認された。

《小学唱歌集》はその後伊澤修二の命により、取調掛が東京音楽学校に改組した後に初の本格的演奏家・作曲家として雇われ、明治 21 年から 27 年 (1888 ～ 1894) まで在職した外国人教師ルードルフ・ディットリヒ Rudolf Dittrich (1867 ～ 1919)²⁸ によって、四声体で和声付けられた。ディットリヒはこの和声付けに際し「第一唱歌ニ適用センガ爲メ、容易ナルオルガン或ハ、ピアノ伴奏ヲ作り、第二之ヲ以テオルガン、ピアノ初学者ノ練習ニ適当ナル材料ニ供シ、次ニ四部合唱初学輩ヲシテ其音声練習ノ用ニ充テシムル是レナリ」と緒言を残している。

和声付け自筆譜を見ると 1 番から 91 番に至るまで、厳格で、対位法的手法も見られる四声体和声が収められており、その水準の高さは唱歌初編の 1 番を見るだけでも十分に伝わるだろう。二音のみで作られた旋律に対して I、IV、V 度の主要三和音にドブルドミナント和音、属七和音、VI 度和音、II 度の七和音で和声付けされている。このディットリヒによる、各曲のタイトルのみで歌詞をとまなわない和声付けは、唱歌教育の伴奏譜として、明治 32 年、《小学唱歌集用オルガン・ピアノ楽譜》のタイトルで出版された。今後このディットリヒの和声付けについても詳細な分析を実施し、検証したい。単旋律の和声的、対位法的編曲であると同時に演奏に際して伴奏譜としての機能も備えた出版譜は、J.S.Bach の《四声コラール

集》に見られるように、ヨーロッパの伝統と直結している点が興味深い²⁹。

おわりに

本論では日本の唱歌教育（教科音楽教育）のために西洋音楽が導入された経緯、創始期の伝習生への教育内容の再確認、そのなかで作成された《小学唱歌集》（全三編）の詳細な分析により、創始期に考えられた唱歌教育が、ソルフェージュと和声に基づいた教育であったことを明らかにした。これらはディットリヒの和声付けまで含めて、現代においても教育効果を十分果たし得る教材である。

やがて、この西洋音楽の理論がそのまま反映された《小学唱歌集》は、明治44年に文部省が発刊した日本人の作曲家による唱歌集《尋常小学唱歌集》へと受け継がれ、教材として用いられることがなくなった一方、《尋常小学唱歌集》は現在の音楽教育へと繋がっている。

学校での音楽教育において必要とされるのは「心情を高尚にさせる音楽のみ」という教育理念から出発した西洋音楽の導入及び音楽教育の原点は、多少偏りはあるものの、やはり教科音楽教育を考える上では忘れてはならない事実であろう。西洋音楽の基盤が何も無い状態から教育を出発させた当時の、唱歌教育指導者養成のために、伝習生に行われた教育内容と学習効果は、現在の教員養成課程においても参考にできる部分が多くあるように思う。

参考文献

- ・Currie James 著、内田彌一訳(1888)『楽典初歩』文部省（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・John Wall Callcott 著、神津元訳、神津専三郎校訂（1883）『楽典』文部省（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・Luther Whiting Mason 著、内田彌一訳（1883）『音楽指南』文部省
- ・Rudolf Dittrich（明治20年代）《唱歌集》東京音楽学校（東京藝術大学附属図書館、資料ID 18801433295）
- ・音楽教育研究所編（1966）『新訂 新しい音楽教育 理論と教材』音楽之友社
- ・齋藤基彦編（2015）『明治の唱歌Ⅰ～Ⅳ』文憲堂
- ・佐沢太郎、河津祐之訳（1873）『仏国学制』（初編卷之一～第三編卷之五）文部省（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・田中不二磨著（1873）『理事日程』全15巻 文部省（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・田甫桂三編著（1980）『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社
- ・東京音楽学校編（1899）《小學唱歌集用オルガンピアノ楽譜》東京音楽学校（東京藝術大学附属図書館、資料ID 18803321084）

- ・ 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社
- ・ 東京芸術大学百年史刊行委員会（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社
- ・ 山下薫子編著（2017）『平成 29 年版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 音楽』東洋館出版社

注

- 1 「唱歌当分之ヲ欠ク」とされ、教授法が整備された後に設けることとされた。
- 2 音楽教育研究所編（1966）『新訂 新しい音楽教育 理論と教材』音楽之友社 6 頁
- 3 同前 10 頁
- 4 山下薫子編著（2017）『平成 29 年版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 音楽』東洋館出版社 44 頁
- 5 同前 56 頁
- 6 田甫桂三編著（1980）『近代日本音楽教育史 I』学文社 9 頁
- 7 この理念（美育）は、平成 29 年度改定の新学習指導要領においても「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。」として、音楽科の目標として明示されている。
- 8 同前 25 頁
- 9 同前 31 頁
- 10 伊澤は音楽取調掛設置後も、演奏会での講演や講演会などいたるところで、下記の例のように音楽教育の必要性を説いていく。
明治 15 年 11 月 20 日 各府県から東京に集まった学務課長に対して伊澤が行った五か条からなる示諭より「第一条 教育上ニ於テ音楽ノ欠ク可ラザル理由。音楽ハ人ノ思想ヲシテ清快ナラシメ一身ノ康安ヲ進メ学業ノ進歩ヲ翼成スルハ云ニ及バズ一家一国ノ治安ヲ致シ人生ノ福祉ヲ隆盛シタル所以及ビ西国ノ教育ニ於テ今日ノ度ニ進ミシモ其興アキラカナル所以ニ拠リ教育上ニ於テ音楽ノ欠ク可ラザル理由ヲ示ス」（東京芸術大学音楽取調掛研究班 [1976]『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 24 頁より引用）
- 11 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 5 頁
- 12 同前 7 頁
- 13 同前 8 頁
- 14 「国楽トハ我国古今固有ノ詞歌曲調ノ善良ナルモノヲ尚研究シ、其ノ足ラサルハ西洋ニ取り終ニ貴賤ニ関ハラズ雅俗ノ別ナク誰ニテモ何レノ節ニテモ日本ノ国民トシテ歌フヘキ国歌、奏ヅヘキ国調ヲ言フ」（東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 7 頁より引用）
- 15 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 8 頁

- 16 同前 344 頁
- 17 同前 346 頁
- 18 同前 369 頁
- 19 東京芸術大学百年史刊行委員会（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社 90～91 頁、東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 375～376 頁を参照。
- 20 東京芸術大学百年史刊行委員会（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社 65～94 頁
- 21 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育設立への軌跡』音楽之友社 97 頁
- 22 各曲の番号は初編から第三編までの通し番号で第一、第二とふられているが、分析においては便宜上 No.1,2 と記載する。
- 23 その後の明治 44 年に文部省から発刊される「尋常小学唱歌集」においては全て日本人の作曲による楽曲となる。
- 24 メーソン著、内田彌一訳（1883）『音楽指南』文部省 8 頁
- 25 出典元となったメーソン著“National Music Charts (Second Series)”を確認すると、各曲に先立って、用いられる音程（音階）とリズム練習用の音符＝数字譜がみられる。
- 26 No.12 までは全て Luther Whiting Mason, “National Music Charts (Second Series)”から出典されている。
- 27 No.58 で初めて短調の曲が出てくるが、この 5 種類の短調が No.58～62 でまとめて取り扱われている。なお、それ以前に出ている日本人の作曲による楽曲（No.39, 44, 47）は、日本音階によるため分類しない。
- 28 オーストリア・ハンガリー帝国ガリツィア地方の小村に生まれ、1878 年ウィーン音楽院に入学し、オルガン、和声、対位法、作曲をブルックナーおよびクレンに師事。他にヴァイオリン、ピアノも学ぶ。ブルックナーの《テ・デウム》初演（1886）ではオルガン・パートを担当するなど、来日前から演奏家として囑望されていた。帰国後はウィーンの宮廷オルガニスト及び母校のオルガン教授となり、またヘルメスベルガー弦楽四重奏団のヴィオラ奏者としても活躍した。
- 29 《四声コラル集》であるが、第一巻が 1765 年に C.P.E. バッハにより、各曲のタイトルのみで歌詞をとまなわない鍵盤楽器用の伴奏譜として出版されている。

【表】小学唱歌初編分析 (No.1～No.12まで)

	曲名	原曲 (原詞) 歌いだし	作曲者	調	拍子	音価	小節数	音域	旋律音程	特徴 (旋律音程は音程と略)
1	かをれ	Lovely May, lovely May,	メーソン	C-dur	2/4	四分音符・休符	8	c ¹ -d ¹	2度	同度の反復とC-Dの2度音程
2	春山	Nature's fair and bright,	〃	C-dur	2/4	四分音符・休符	6	c ¹ -e ¹	2度	C-Eまでの音を、同度の反復を伴いながら順次進行で歌う
3	あがれ	Bells do ring, bells do ring,	〃	C-dur	2/4	四分音符・休符	8	c ¹ -e ¹	2度～3度	E-Cの3度の音程を初めて扱う
4	いはへ	Sunshine bright, sunshine bright,	〃	C-dur	2/4	四分音符・休符	8	c ¹ -f ¹	2度～3度	音域はC-Fの4度に広がるが、音程はC-Eの3度まで
5	千代に	Fair Spring days, joyous days!	〃	C-dur	2/4	四分音符・休符	8	c ¹ -f ¹	2度～4度	C-E, D-Fの3度音程、C-Fまでの4度音程、F-Cまでの4度の下行順次進行
6	和歌の浦	The sun to cheer us brings the day,	〃	C-dur	2/4	四分音符	8	c ¹ -f ¹	2度～3度	順次進行と3度音程 初めてアウフタクトが扱われる
7	春は花見	Trust in God, trust in God,	〃	C-dur	2/4	四分音符 二分音符	8	c ¹ -g ¹	2度	音域がGまで広がり、二分音符も初めて使用される が、音程は順次進行と同度の反復のみ
8	鶯	Let us sing a merry lay,	〃	C-dur	2/4	四分音符 二分音符	8	c ¹ -g ¹	2度	C-G, G-Cの上行・下行5度の順次進行
9	野辺に	See how the setting sun fades in the west.	Hohmann	C-dur	3/4	四分音符・休符 二分音符	8	c ¹ -g ¹	2度	初めて3拍子が扱われる 音程は同度反復と2度の順次進行のみ
10	春風	Kund, protecting God in heaven,	メーソン	C-dur	2/4	四分音符・休符	16	c ¹ -a ¹	2度～3度	音域がAまで広がるが、同度の反復と2度の順次進行が中心、跳躍はC-E1回のみ
11	桜紅葉	Though my cot be poor and scanty,	〃	C-dur	4/4	四分音符・休符	8	c ¹ -a ¹	2度	初めて4拍子が扱われる C-G, D-Aの5度を順次進行で歌う
12	花咲く春	Birds that in th forest throng,	〃	C-dur	4/4	四分音符・休符	8	c ¹ -a ¹	2度～5度	C-E-G, D-F-Aの三和音が分散和音で扱われる 5度の跳躍が初めて扱われる

A Methodological Study of Music as a Required Subject: Focusing on the Longitudinal Approach of Harmony and Solfège

TAKAHAMA Eriko

In Japan, music was ordained as a required subject in the old educational system of 1872. Based on school districts, which was adopted the old educational system, two music programs were formulated: “Shoka” (literally means, to sing songs) in elementary schools and “Sogaku” (literally means, to play music) in junior high schools. True music education started when the Institute of Music, founded in 1879, began to arrange songs to be sung in schools, referring to Western music. Since then, music education has continued until the present with many variations, while remaining a required subject.

Although all Japanese study music for nine years in the current compulsory educational system, there are still many musical illiterates. Moreover, even in music colleges, which are supposed to provide specialized education, deep concerns have arisen that student’s basic music skills, such as reading and writing scores, have decreased. This most likely results not from issues with the specialized education but from defects of music education as a required subject.

The Institute of Music gradually became specialized and was soon reorganized as the Tokyo Music School. However, the institute originally laid the foundation for modern music education by examining Western music, arranging songs, and training educators. To fully consider existing issues in and the prospects of compulsory music education, it is useful to investigate the substance of the institute’s educational projects. This paper focuses on “collection of elementary school songs (three volumes)” from the perspectives of harmony and solfège for music education at school. Developed from scratch, the course, in which solfège and harmony are deeply associated, directly reflect theories of Western music and is systematically ordered. Given these facts, this paper considers exemplars of music education at school and highlights how a teacher training course should be.